

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11806

研究課題名(和文) 成人期の自閉症スペクトラム障害者に対する看護技術習得のための教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of education program for acquiring nursing skills in adults with

研究代表者

川田 美和 (Kawada, Miwa)

兵庫県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：70364049

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目標は、成人期の自閉症スペクトラム障害をもつ人とその家族に対する基本的な看護技術を習得するための教育プログラムの開発である。まず、精神科専門看護師5名へのインタビューに基づき、自閉症スペクトラム障害の理解、自閉症スペクトラム障害をもつ人との関わり方、自閉症スペクトラム障害をもつ人の家族支援、元気にケアを続けるための工夫、の4つのSessionから成るプログラムを考案した。その後、精神科看護師24名を対象としてプログラムを実施した結果、プログラムは有効であることが明らかとなったが、さらに家族支援、二次障害に関する内容を強化する必要があると考えられた。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to develop education program for acquiring basic nursing skills needed to support adults with autism spectrum disorders and their family members. After conducting interviews with 5 psychiatric nurses, we analyzed the results and suggested the program composed of the following 4 sessions: I. Understanding of autism spectrum disorders, II. Ways of interacting with adults with autism spectrum disorders, III. Support for family members of adults with autism spectrum disorders, IV. Efforts to vigorously carry on caregiving activities. Later, our suggested program was implemented with 24 psychiatric nurses, which revealed that this program is effective. However, we found it necessary to further improve the contents related to family support and secondary disability.

研究分野：精神看護

キーワード：自閉症 発達障害 成人期 看護

1. 研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム障害の特性は生涯にわたり持続するが、青年期以降は、将来の選択や親からの自立といった発達課題をこなさねばならず、その特性から、困難さはより増すこととなる。それが契機となり診断を受けたり、二次障害として精神症状を併発することも多く(川上ら, 2008; 斉藤, 2009; 藤平, 2011)、継続的な精神科医療・看護のサポート対象となる可能性は高い。また、当然ながら、身体疾患により看護のサポート対象となることも多い。研究者(川田, 2013)が行った精神科訪問看護師を対象とした調査においては、対象者の8割以上が、成人期の発達障害者支援に困難を感じていること、そして、その理由の多くが、自身の力不足や知識不足であると考えていること、さらに、発達障害者支援に関する知識や技術の獲得の機会を望んでいることが明らかになった。実際、精神看護専門看護師の実践を行っている申請者の経験においても、成人期の発達障害者とその家族支援に関する相談が年々増している状況である。青年期以降は二次障害を抱え複雑な問題に直面している者も多いが、申請者の経験や調査で明らかになった支援の困難さの内容の多くは、障害特性の理解不足によるコミュニケーションの難しさ、パニックやこだわりへの対応等、むしろ基本的な対応方法についてであった。

また、成人期ではないものの、書上ら(2007)も、自閉症児の家族を対象に、医療機関を受診した際の困難状況と医療者への要望について調査しているが、要望に関する140の記述のうち、42が自閉症の知識と対応を身につけてほしいという内容であったとしている。

さらに福田ら(2011)も、発達障害者の支援において、これまで精神科医療で積みあげてきた知識が役立つはずであることを強調した上で、支援するにあたっては、やはり発

達障害特性に関する知識が必要であること、これまでの知識を発達障害の視点で再整理することが重要であると述べている。しかしながら、成人期の自閉症スペクトラム障害をもつ人やその家族に対する看護についての研究はごく少数で、援助技術に関する体系的な研究はなされておらず、基礎教育の中でさえ、十分な教育がなれているとは言い難い状況であると言える。

以上より、成人期の自閉症スペクトラム障害をもつ人とその家族への支援に必要な知識の体系化ならびに支援技術の教育は、看護学分野における重要な課題であると考えられる。

2. 研究の目的

成人期の自閉症スペクトラム障害をもつ人とその家族に対する基本的な看護技術を習得するための教育プログラムを開発する。

3. 研究の方法

本研究は、以下の2段階に分けて実施した。

(1) 第1段階：プログラム案の作成

5名の精神看護専門看護師への半構造的なインタビューを実施し、質的分析により、看護師に必要な支援技術を明らかにした。

結果に基づき、アンドラゴジーモデルの考え方を基盤とし、プログラム案を作成した。アンドラゴジーモデルとは、すでに効果が実証され、看護教育や患者教育に活用されている Knowles, M., S. (1980) の考え方である。この考え方に基づき、プログラムを受ける看護者を、依存的ではなく自律的(自己決定的)である、これまでの経験は、学習の資源として活用できる、学習への準備性は、発達課題や社会的役割(今回は特に看護職者としての社会的役割)に応じた内容を必要としている、学びの方向づけは、課題達成・問題解決を中心した内容を必要している、という特徴をもっていると考えた。

(2) 第2段階：プログラムの実施・評価

(1) で作成したプログラム案について、24名の精神科看護師を対象とした介入研究を行い、実施・評価した。

4. 研究成果

(1) プログラム案

5名の精神看護専門看護師を対象に実施したインタビュー調査の結果に基づき、自閉症スペクトラム障害の理解、自閉症スペクトラム障害をもつ人との関わり方、自閉症スペクトラム障害をもつ人の家族支援、元気にケアを続けるための工夫、の4つのSessionから成るプログラムを考案した。プログラムは、講義、グループワーク、ロールプレイで構成されている。大きな特徴としては、障害特性について、当事者の生きづらさに目を向けた理解ができることを目指し、講義の講師を当事者としたことである。汎用性を高めるために、講義については映像(DVD)としてまとめた。

以下、それぞれのSession内容について以下に述べる。

1) 自閉症スペクトラム障害の理解(表1参照)

このSessionの目標は、自閉症スペクトラム障害についての一般知識を得る、当事者の立場に立った特性理解ができる、問題行動の背景が理解できる、問題行動に対する具体的なケアが考えられる、である。内容は、講義の講師である当事者のこれまでの体験、当事者の生きづらさに焦点をあてた障害特性の理解、現場で看護師が頻回に遭遇する困った場面の理解についての講義の後、グループワークで、ケア計画の立案を行うという構成となっている。現場で看護師が頻回に遭遇する困った場面については、より具体的にイメージできるように、看護師が困った具体的な場面について質問し、講師が答える、という形の講義とした。

表1. Session 自閉症スペクトラム障害の理解

講義	1. はじめに(当事者としてのこれまでの体験)
	2. 特性の理解 自閉症スペクトラム障害の定義・感覚過敏・視覚認知・心の理論・注意の移動
	3. 対応に困る行動の理解 困る行動の背景の理解 具体的な相談 場面1. どうして乱暴な行動や衝動行為をするの? 場面2. どうして、約束を守れないの?? 場面3. どうしてすぐに死にたいって言うの??
グループワーク	1. 上記3- の具体的に困る場面から、1場面を選んで、ケア計画をどのように立てるか話し合う 2. 話し合う際は、以下のポイントについて考える 周囲にとっての問題行動について、本人の立場に立って、その行動の意味を理解してみる(講義を聴いて分かったこと・感じたことを含めても良い) - 具体的に、どう関われば良いと思うかについて話し合う(回答を参考にしても良いが、事例をイメージしながら、さらに具体的に計画してみる) 共有

2) 自閉症スペクトラム障害をもつ人との関わり方(表2参照)

このSessionの目標は、コミュニケーション方法の工夫について知識を得る、体験を通して実践に活用できるコミュニケーション方法の学びが得られる、である。内容は、自閉症スペクトラム障害をもつ人とのコミュニケーションに有効な工夫についての講義、具体的なケア場面での伝え方の工夫についての講義の後、ロールプレイで練習を行う構成となっている。具体的なケア場面については、Sessionと同様、看護師が質問し、講師がそれに答える形の講義とした。

表2. Session 自閉症スペクトラム障害をもつ人との関わり方

講義	1. コミュニケーションの工夫 話の聴き方の技術 スクリプトと視覚化・構造化による支援
	2. こんな時どう対応すればいいの? 予定の変更を伝える場面 何度も同じことを質問される場面 本人の意に添わないことを伝える場面
ロールプレイ	1. 3人一組になり、上記 ~ の場面のうち、一つを選ぶ。 2. NS役、PT役、観察者役を決めて、ロールプレイをする 3. 終わったら、以下の手順で繰り返し NSが感想や工夫点を話す 患者役が感想とNS役の良かったところ、こうするともっと良かったところ、について伝える 観察者役がNS役の良かったところ、こうするともっと良かったところ、について伝える 役割を交代して、全員がNS役を体験する。

3) 自閉症スペクトラム障害をもつ人の家族支援(表3参照)

このSessionの目標は、家族の思いを理解する、家族支援の方法についての知識を

得る、具体的な家族支援方法について考えられる、である。内容は、成人期にある当事者の家族がこれまでに歩んできた苦労や体験についての講義の後、現場で頻回に出会う家族への対応方法についての講義とした。対応方法については、Session ，同様、看護師が質問し、講師が答えるという形の講義とした。

表3. Session . 自閉症スペクトラム障害をもつ人の家族支援

<p>1. ご家族の思いと必要な支援 2. 具体的な相談</p>
<p>子どもとの距離が近すぎるとご家族へのアドバイス 子どもから責められ続けるご家族へのアドバイス 子どもから暴力を受けているご家族へのアドバイス</p>

4) Session . 元気にケアを続けるための工夫 (表4参照)

このSessionの目標は、自分のこれまでの支援について振り返りができる、今後の支援への自信を高められる、である。内容は、ケアのポイントを伝えた後、看護師のエンパワメントにつながるよう、日々のケア体験の共有や看護師自身がより良い状態でケアを続けられる工夫について話し合うグループワークとした。

表4. Session . 元気にケアを続けるための工夫

<p>自閉症スペクトラム障害をもつ人へのケアのポイント ご本人の得意・不得意を知りましょう。 (特性は人それぞれ、本人にあった関わり方が大切。得意なことを求めすぎてもお互いにしんどくなる。得意を伸ばす関わりをする) 表面化している行動に振り回されないようにしましょう (本人の中で何がおこっているのが客観的にアセスメントし、チームで共有する。)人によっては言葉表現得意じゃない場合もある。背景にある思いに目を向けるようにする) ご本人の頑張っているところに目を向けましょう (私たちにとっては普通でも、実はご本人は、とても頑張っている場合がある。その頑張りに気づくことも大切) 自分たちの頑張りに目を向けましょう (成果がでにくいと、時にしんどくなる。) チームでサポートし合ひましょう 上手にストレスコントロールをしましょう 日々のケアでしんどいことや、元気にケアを続けていくための工夫について話し合う 研修全体を通しての学びについて共有する</p>

(2) プログラムの実施・評価

1) 対象者

男性5名、女性19名の計24名で、看護職者としての経験年数は9ヶ月~25年、平均11.9年であった。

2) 選択式アンケート結果

目標に添って、自閉症スペクトラム障害についての理解が深まった、当事者の立場に立った特性理解が深まった、問題行動の背景の理解が深まった、問題行動に対するケアについて現場で活用できそうな内容が学べた、コミュニケーション方法の工夫について新しい知識が得られた、コミュニケーション方法について実際に活用できそうな学びが得られた、家族の思いについて理解が深まった、家族支援の方法について新しい知識が得られた、家族支援方法について実際に活用できそうな学びが得られた、自分のこれまでの支援について振り返りができた、自閉症スペクトラム障害をもつ人への支援について研修前よりも自信が高まった、支援方法についてもっと学びたい、あるいは学ぶ必要があると感じた、取り入れてみたいと思える具体的な支援方法が見つかった、チームや自分のこれまでの支援方法に自信をもてた、チームや自分の支援方法について具体的な改善点や課題が明らかになった、の15項目について、1 とてもそう思う、2 まあまあそう思う、3 あまりそう思わない、4 全くそう思わない、の4択式のアンケートを実施した結果、~、ならびにについては、1、2の回答で100%を占めた。4の回答があった項目はなかった。3の回答は、どの項目も1~2名の回答であったが、の質問のみ7名(29.17%)の回答があった。

概ね目標を達成したが、支援の自信の向上には十分効果が得られなかったと言える。

3) 自由回答式アンケート結果

プログラムの良かった点と改善点について質問した結果、良かった点では、複数の対象者が、「当事者の体験に基づく学び」「ロールプレイやグループワークによる視野の広がり」「具体例の提示によるイメージのしやすさ」と回答した。改善点については、複数

の対象者が「家族支援に関する内容の充実」「グループワークの時間の増大」と回答した。また、1名のみであったが、「二次障害への対応に関する内容の追加」という回答もあった。

(3) プログラムの修正点

家族支援に関する内容については、さらに充実させる必要がある。具体的には、家族自身の語りを用いた講義や、グループワーク・ロールプレイによる家族支援の演習を追加するなど考えられる。また、二次障害のある当事者への対応に苦慮するケースは、現場でも頻回に遭遇するため、具体的な支援方法に関する内容を追加する必要がある。上記内容の追加に加え、グループワークやロールプレイの時間を増大することで、プログラムがさらに充実し、今回、十分な効果が得られなかった、支援の自信の向上にも奏功するのではないかと考えられる。

(4) 本プログラムの意義

本プログラムは、国内外でも見られない看護職者を対象とした成人期自閉症スペクトラム障害者とその家族支援のための教育プログラムである。更なる修正と精錬の余地はあるものの、自閉症スペクトラム障害者とその家族支援の看護の質向上に大きく寄与するものとする。

参考文献

- ・川上千尋、辻井正次(2008).高機能PDDを持つ子どもの保護者へのペアレント・トレーニング-日本文化のなかで子育てを楽しくしていく視点から 精神科治療学,23(10), 1181-1186.
- ・藤平俊幸(2011)成人期中期におこる変化, 困難さとその支援.精神科臨床サービス, 11(2), 220-232.
- ・福田正人,有賀道生,成田秀幸,渥美委規,福地英彰,池田優子,亀山正樹,米田衆介.発達障害・発達特性の見方を治療と支援に生かす 精神科臨床サービス.11,2011,160-167.
- ・書上まりこ,小口多美子.自閉症児の,医

療機関受診時の困難と医療者への要望-家族によるアンケート調査より-.小児看護,2007,152-154.

・川田美和(2013).青年・成人期の広汎性発達障害をもつ人とその家族への訪問看護の役割の検討.兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要,20;55-67.

・Knowles, M. S.(1980). The Modern Practice of Adult Education: From Pedagogy to Andragogy (2nd ed.). New York: Cambridge Books. / 堀薫夫,三輪建二監訳(2002).成人教育の現場的实践-ペダゴジーからアンドラゴジーへ.鳳書房.

・斎藤万比呂(2009).発達障害が引き起こす二次障害へのケアとサポート,学習研究社.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

川田美和,岡田俊,片山貴文,野嶋佐由美(2017).成人期にある高機能自閉症スペクトラム障害者の家族支援のニーズ~インタビュー調査に基づく分析~.査読有,高知女子大学看護学会誌,43:140-150.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川田 美和(KAWADA, Miwa)
兵庫県立大学・看護学部・准教授
研究者番号:70364049

(2) 研究分担者

野嶋 佐由美(NOJIMA, Sayumi)
高知県立大学・看護学部・教授
研究者番号:00172792

岡田 俊(OKADA, Takashi)
名古屋大学医学部附属病院・准教授
研究者番号:80335249